

9月13日から15日にかけて標記学術大会が天理大学杣之内キャンパスを会場に開催された。13日には開会式の後、公開シンポジウム「宗教研究のインサイダーとアウトサイダー—信仰者の自己理解と宗教の学術研究をめぐる—」では、東馬場郁生人文学部宗教学科教授が趣旨説明をし、岡田正彦人文学部宗教学科教授や渡辺優東京大学大学院人文社会系研究科准教授などが登壇した。

14日及び15日には、11の部会で個人研究とパネルの発表が行われた。天理大学関係者の発表は以下の通り。

堀内みどり：翻訳とは何か—何がどのように翻訳できるのか—（パネル「“翻訳”をめぐる諸課題について—天理教を事例に—」）

尾上貴行：「異文化伝道」における「翻訳」について（同上）

中西光一：天理教ブラジル伝道と教義翻訳の実相—“教祖伝”を事例に—（同上）

加藤匡人：「みかぐらうた」の「翻訳」と身体—アサドの翻訳論の視点から—（同上）

金子 昭：宗教 2 世問題が宗教教団のあり方に訴えるもの（パネル「宗教教団の社会的責務を問う」）

澤井義次：宗教概念としての「無宗教」とその意味構造（パネル「現代日本の宗教学の諸概念とその再検討」）

澤井 真：イスラームにおける神秘主義的アイデンティティの創出

澤井治郎：教会を設置すること—初期天理教において—

森下三郎：近年の儀礼研究の展開—D. ジガラタスの儀礼論をめぐって—

山川 仁：パークリの非物質論と神学上の概念

深谷耕治：セベリア・アントンの和辻哲郎論

日沖直子：平井金三の Japanism

神田秀雄：宗教団体法による「宗教結社」統制の具体相と特質

山本佳世子：スピリチュアルケア提供者による看護師のケアのあり方の検討（パネル「何が『ケアする人』を支えるのか？」）

また、他に天理教関連の発表が三つあった。

青木 繁（東京工業大）：里親養育における宗教の社会参加—天理教を事例として—

道蔦汐里（東京工業大）：新宗教の信仰継承における教団イベントの役割—天理教を事例に—

村山元理（駒沢大）：天理教の天啓継承問題の探求—教祖存命の理と茨木事件の再考—

『近代真宗大谷派年表』には、明治九年「六・二八 教部省より、太陽暦と須弥山説との混乱なきよう達せられる」とある。一般にこの頃から、教導職による須弥山説の教示が禁止されたことになっているが、その理由や具体的な内容についてはよく知られていない。

なぜ、須弥山説の停止が通達されたのか。今回の研究報告会では、この通達の原因の一つとされる、釈雲照（一八二七—一九〇九）が起こした布教中止事件をとりあげた。小学校の教育内容を批判して島根県と全面対立した雲照は、最終的に本山と教部省を巻き込んだ騒動の果てに勸修寺の住職と教導職の立場を追われることになる。このときの議論の中心が、明治改暦以来の開明的な宇宙論／地動説と仏教の宇宙論／須弥説の対立であった。

本発表では、①島根県令や小学校教員の上申書、②釈雲照の書簡、③『明教新誌』の論説をもとにこの事件の詳細を確認し、この時期の学校教育と宗教的教化の軋轢、国体思想と仏教の緊張関係、科学的知識と宗教的信仰の差異、日本精神と西洋文化の位置関係などについて考えた。

## 連載執筆のねらいと執筆者紹介

### 「ブラジルの宗教的風景」

本連載では「宗教」と「移民」をテーマに、アメリカ南部人移民とプロテスタントに焦点を当て、知られざるブラジルの姿を解き明かしていきたい。米国の南北戦争後に南部からブラジルに移住した約 4,000 人は農業植民活動に従事し、綿花やスイカの栽培を普及させた。特に、彼らはプロテスタント教会とアメリカンスクールの設立に貢献し、筆者はその経験を通じて宗教探求の意義を考え、本連載が海外伝道の推進に寄与することを願っている。

### 中西光一（なかにし みつかず）

天理大学おやさと研究所講師。1986 年、ブラジル・サンパウロ州生まれ。サンパウロ大学大学院博士後期課程を修了し、博士（歴史学）を取得。天理教海外部、子ども多文化共生サポーター（兵庫県教育委員会）、近畿大学経営学部非常勤講師、天理大学国際学部非常勤講師などを経て、2024 年 4 月より現職。専門はブラジル史、近代奴隷制史。

